

東大病院だより

表題：海野濤山書

No. 55



文学部3号館屋上から望む、三四郎池の紅葉と東大病院

CONTENTS

- ◆ II期中央診療棟の竣工記念式典及び祝賀会 2
- ◆ II期中央診療棟の紹介 3
- ◆ 卒業アルバムにみる東京大学医学部と東大病院のあゆみ …(永井)..... 4
- ◆ 新任科長挨拶 小児外科 岩中教授 6
- ◆ 新任科長挨拶 リハビリテーション科 芳賀教授 7
- ◆ 東大病院創立150周年に向けて シリーズ第13回
内科物理療法学の誕生
—真鍋嘉一郎初代教授の生涯と夏目漱石— …(加我、三浦)..... 8
- ◆ <東大病院の“遺産”シリーズ 9>
1. 作曲家・山田耕筰から寄贈されたドイツ“スタインベルク社
製ピアノ”(看護師宿舎).....(加我、三浦) ... 10
- ◆ 医学歴史ミュージアムの紹介 (4)
パリ大学医学部(デカルト大学)の医学歴史博物館(1954年創立) …(加我) ... 12
- ◆ クリスマスのイルミネーション点灯について 13
- ◆ 出来事 14
- ◆ 東大病院の四季(秋の彩り) 16

Ⅱ期中央診療棟の竣工記念式典及び祝賀会

医学部附属病院では、Ⅱ期中央診療棟の竣工を祝い、9月15日（金）16時から記念式典と祝賀会を挙

行了た。
また、式典に先立ち、地下3階ライナック室、1階新救急外来、2階検査部、4階手術部及び8・9階22世紀医療センター等の施設見学が行われ、新たに誕生した未来型医療の拠点に関係者にアピールした。

記念式典では、永井良三病院長から竣工に際し、昭和50年代に始まった東大病院の再開発計画の長い歴史と新棟の竣工に至るまでの計画の中で、建物というハード面の検討だけでなく法人化に伴う機構整備や医療の質の改善等、ソフトの改革を緻密に行ったこと、さらには、東大病院に期待される役割と成果を未来に向けて発信する等の式辞が述べられた。

続いて、小宮山宏総長、廣川信隆大学院医学系研究科長・医学部長の挨拶が行われた。その後、文部科学省 林幸秀文部科学審議官、独立行政法人国立病院機構 矢崎義雄理事長、千葉大学医学部附属病

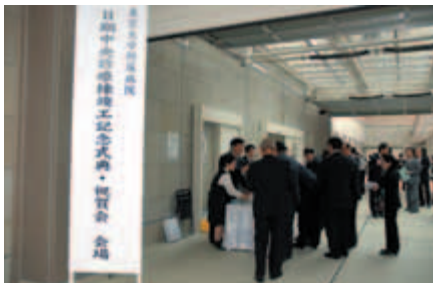
院 齋藤康病院長から祝辞をいただき、長坂潤一施設部長から工事概要の報告、永井病院長より工事関係業者を代表して、株式会社大林組へ感謝状の贈呈が行われ閉会した。

祝賀会は、西尾茂文理事（副学長）から挨拶をいただき、文部科学省 清水潔高等教育局長、鉄門倶楽部顧問 織田敏次名誉教授から祝辞をいただき、中村耕三副院長の発声により乾杯した。

祝賀会場には、明治初期から平成に至るまでの東大病院の歴史の変遷を語る30点に及ぶ貴重な写真資料が展示された。

式典及び祝賀会は、約300名の関係者の参加により華やかかつ和やかに進行し、煙山力文京区長から祝辞をいただいた後、大内尉義副院長の謝辞により18時30分に閉会した。

なお、Ⅱ期中央診療棟は10月2日（月）から順次開院し、検査・診療を開始した。



1. 式典・祝賀会受付の様子



2. 式典開会式前に行われた施設見学の様子



3. 永井病院長式辞



4. 小宮山総長挨拶



5. 廣川大学院医学系研究科長・医学部長挨拶



6. 林文部科学審議官祝辞



7. 織田鉄門倶楽部顧問祝辞



8. 祝賀会場の写真展示の様子



9. 煙山文京区長祝辞

東京大学医学部附属病院Ⅱ期中央診療棟竣工記念式典・祝賀会（平成18年9月15日）

式典次第

- 一、開式
- 一、式辞 東京大学医学部附属病院長
永井良三
- 一、挨拶 東京大学総長 小宮山 宏
東京大学大学院医学系研究科長・医学部長
廣川 信 隆
- 一、来賓祝辞 文部科学省文部科学審議官
林 幸 秀
独立行政法人国立病院機構理事長
矢崎 義 雄
千葉大学医学部附属病院長
齋藤 康
- 一、祝電披露
- 一、工事概要報告 東京大学施設部長
長坂 潤 一
- 一、感謝状贈呈 東京大学医学部附属病院長
永井良三
- 一、閉式

祝賀会次第

- 一、開会
- 一、挨拶 東京大学理事（副学長）
西尾 茂 文
- 一、来賓祝辞 文部科学省高等教育局長
清水 潔
国立国際医療センター研究所長
桐野 高明
鉄門倶楽部顧問 織田 敏 次
文京区長 煙山 力
- 一、乾杯 東京大学医学部附属病院副院長
中村 耕 三
- 一、祝宴
- 一、謝辞 東京大学医学部附属病院副院長
大内 尉 義
- 一、閉会

Ⅱ期中央診療棟の紹介



中央診療棟2エレベータ花絵

中央診療棟2の概要

- 建築年 平成18年
- 構造・階数 鉄骨造（一部鉄筋コンクリート造）
地上9階地下3階
- 敷地面積 3,709m²
- 延べ床面積 36,195m²
- 基本設計 東京大学施設部
- 建築設計 株式会社岡田新一設計事務所
- 設備設計 株式会社総合設備計画
- 建築施工 大林・銭高・池田特定建設工事共同企業体

中央診療棟2フロア案内図

- 9階 22世紀医療センター
- 8階 22世紀医療センター
- 7階 22世紀医療センター
大会議室
病理部（病理診断）
- 6階 リハビリテーション部
ボランティア・にこにこ文庫
臨床試験部
- 5階 手術部
- 4階 手術部
- 3階 周産母子診療部・IVFセンター
東大こだま分教室
血液浄化療法部
- 2階 検査部（生理）
臨床試験・連携受診受付
- 1階 光学医療診療部
救急部・時間外受付
時間外薬局（入院調剤室）
- B1階 MRI・体外衝撃波結石破碎室
CPC・組織バンク
地域医療連携部
- B2階 病理部（オートプシー室 電顕室）
- B3階 放射線治療

卒業アルバムにみる東京大学医学部と東大病院のあゆみ

第Ⅰ部 明治初期から関東大震災まで（写真展開催）

11月6日（月）～1月下旬まで期間を延長し、中央診療棟2の1階及び地下1階廊下にて、医学部・医学部附属病院創立150周年記念事業委員会の主催により「卒業アルバムにみる東京大学医学部と東大病院のあゆみ第Ⅰ部 明治初期から関東大震災まで」（写真展）を開催して、医学部と附属病院の貴重な歴史的写真の展示を行っています。



写真展示会場の様子

医学部卒業アルバムからよみがえる明治大正期の本郷キャンパス

病院長 永井良三

東京大学医学図書館には学生の卒業アルバムが多数保存されています。現存する最も古いアルバムは明治36年（1903）ですが、明治35年（1902）の卒業生が最初に作成したという記録があります。また、明治34年（1901）の卒業生は卒業後10年目の明治44年にアルバムを作りました。その後、競うように立派なアルバムが毎年作成されました。ただし寄贈されなかったり紛失したためか、アルバムは学年によって欠落があります。とくに太平洋戦争や大学紛争のさなかには作成されていません。それでもこれらのアルバムに残された写真をたどることにより、医学、医療、医学教育、キャンパス再開発に関する貴重な歴史を明らかにすることができます。今回、中央診療棟2の1階と地下1階の廊下で、卒業アルバムを中心とした写真展を開催することにいたしました。明治初期から関東大震災までを第Ⅰ部、震災復興、太平洋戦争、戦後復興、大学紛争を経て今日の再開発に至るまでを第Ⅱ部として展示いたします。第Ⅰ部



の展示期間は1月下旬までを予定しております。

東京大学には卒業アルバム以外にもいくつかの重要なアルバムが残されています。明治33年（1900）東京帝国大学アルバムは、当時ロンドンで開催された万国博覧会に日本の発展を示すために作成されたものです。このアルバムにも医学部と附属病院の当時の姿がたくさん記録されています。明治37年（1904）にも同様のアルバムが作成されました。当初の医学部卒業アルバムにはこれらの帝国大学アルバムから引用した写真が多数引用されました。明治33年以前の公式なアルバムはありませんが、明治初期から卒業時などに個人的に記念写真を撮影することは広く行われていたようです。医化学助教授だった須藤憲三先生（後の金沢医科大学学長）は明治30年頃の医学と病院の写真を多数撮影されています。



写真1 東京大学総合図書館所蔵

写真1 は明治33年頃の旧医学部本館で、東京帝国大学アルバムに掲載されている写真です。この建物

は明治12年（1879）に医学部本館として竣工し、明治天皇のご臨席のもとに開業式が行われました。当初は予科、内科、外科などの講義が行われていましたが、教室が整備されるようになると、眼科、産婦人科、耳鼻科などの外来として利用されました。明治43年（1910）に取り壊されて赤門脇に移築、史料編纂掛として使用されました。その後、昭和35年（1960）頃まで営繕課が使用しました。時計台の部分は改造されましたが、東京大学最古の建築物として、また国の重要文化財として、現在も小石川植物園に保存されています。



写真2 東京大学医学図書館所蔵

写真2は、現在の南研究棟（赤レンガ）前の交差点から医学図書館方面を、明治41年（1908）頃に撮影したものです。右手のレンガの建物は病理学教室、左手は薬学教室、その手前の白い建物は医学部事務室です。ベルツ・スクリバの銅像は明治40年（1907）に竣工し、医学図書館が昭和35年に完成したときに、現在の位置に移設されました。病理学に隣接して解剖学教室、法医学教室が並んでいましたが、関東大震災により大破し、いずれの建物も右半分が一階建てに改造されました。



写真3 東京大学医学図書館所蔵



写真4 東京大学医学図書館所蔵

写真3は、南新門（現在の龍岡門）と外来診察所で、明治43年（1910）頃の撮影です。外来診察所は明治42年（1907）に竣工しました。関東大震災では被害を受けませんでした。昭和4年（1929）6月に火災を起こし（**写真4**）、前面を部分解体されました。

その後、現在の外来棟の場所に木造の外来診察所を建設して緊急対応しました。この火災のことは東京大学百年史には記載されていませんが、卒業生アルバムではじめて分かりました。



写真5 東京大学医学図書館所蔵

写真5は隅田川のポートレースで、明治44年（1911）頃の撮影です。外人教師の勤めでポートが盛んになったようです。毎年、学部対抗のレースが行われました。Mは医学部の旗、Aは恐らく農学部の旗と思われます。対岸の建物は向島の艇庫で、長命寺の隣にあたります。行き交う舟はすべて櫓で漕がれていた時代です。

卒業アルバムには、これからの医学教育、診療、病院再開発に参考となる情報がたくさん含まれています。また、医学、医療に対する先人の意気込みが伝わってきます。関東大震災までの本郷キャンパスは、まさに司馬遼太郎の「坂の上の雲」の時代であり、日本の青春時代にあたります。東京大学医学部と附属病院が日本の近代化とともに歩んできたことが改めて実感されます。

新任科長挨拶



小児外科

いわなか
岩中ただし
督

このたび平成18年8月1日付けで小児外科科長を拝命いたしました。米国留学、他施設での勤務を経て12年ぶりに東大病院に戻りましたが、国立大学法人化ならびに執行部体制の充実化に伴うソフト面での大きな変革、入院棟A・中央診療棟2に代表されるハード面での変革には、素直な驚きを感じます。埼玉県立小児医療センターという臨床中心の小児病院から転任して参りましたが、施設・組織の大きさでは比べようもなく、東大病院の規模の大きさに少々とまどっている、というのが正直な感想です。ただ設備の整ったこの大きな施設に赴任したことにより、「新たに何ができ、何を発信できるか」という前向きな気持ちを持てる喜びも同時に感じています。

小児外科学の領域は、先天性の様々な奇形、小児の炎症性疾患、小児がん、外科的な消化器疾患・呼吸器疾患・泌尿生殖器疾患など、心臓以外の躯幹の臓器のほとんどを取り扱いますが、その対象となる小児も、胎児を含め新生児期より思春期まで多岐にわたります。小児外科医は、小児の一般外科医としてこれらの様々な疾患に対応しますが、鼠径ヘルニアや急性虫垂炎を除くと、その大半の疾患は本邦発生数2~300件前後の稀な疾患です。現在我が国には、日本小児外科学会が認定した小児外科認定施設が約90施設あります。これらの施設が多少の地域格差や偏りがあるとはいえ、これらの稀な症例を分担していますので、1施設あたりの症例数は必然的に少なくなります。このような状況においても、東大病院小児外科においては将来指導医的立場に立てる若手小児外科医を育成していかねばなりません。関連施設と協力し、限られた症例で有効な教育を行い、国際的な視野に立てる全人的な小児外科医を育てるとともに、我が国における小児外科医育機関の中核施設として活動してまいりたいと考えております。

私自身は、平成6年より米国オハイオ州シンシナティ小児病院へ、小児がん領域における低侵襲手術の開発を目的に2年半留学いたしました。平成9年4月に前職の埼玉県立小児医療センターに赴任し、米国で培った技術を基

に積極的に小児腹腔鏡・胸腔鏡手術を行ってまいりました。特に、幼若乳児の低侵襲手術の術式の開発に努め、現在一部の疾患では手術時体重2~3kgの症例においても実施可能となっています。一方で精神運動発達遅滞児のQOLの向上をめざして、腹腔鏡下噴門形成術や胃瘻造設術などにも積極的に取り組み、周辺の重症心身障害児施設との連携を構築しました。今後東大病院において、これらの小児内視鏡手術を標準術式と認めていただけるよう、診療科を挙げて安全性、確実性、低侵襲性などを証明し、各方面に訴えていこうと考えております。

現在我が国は未曾有の少子化社会を迎えています。そのため数多くの中核病院が小児の入院病床を削減し、その結果小児医療体制が崩壊しつつあります。厚生労働省は平成18年度の診療報酬改正で、小児医療に重点的な加算をいたしました。医師の過重労働などの構造的諸問題を解決するまでには至っておりません。また特に社会問題化している小児救急医療の裾野を広げるために、診療報酬上様々な加算・増点が認められましたが、小児救急医療を底辺から支えるためには、日常診療を行う地域の小児医療機関と中核的病院が機能的に連携し、さらに高次の医療が求められる小児のために小児救命救急センターが整備されることが必要です。小児外科では、中央診療棟IIが完成し救急診療体制が充実したこの機会に、東大病院の関連諸科と連携して、高次の小児救急診療を提供していきたいと考えています。今後とも皆様のご指導ご鞭撻をよろしくお願い申し上げます。

岩中 督 教授の略歴

昭和55年 3月	東京大学医学部医学科卒業
昭和53年 6月	東京大学医学部附属病院外科系研修医
昭和54年12月	静岡県藤枝市立志太総合病院外科
昭和56年 9月	東京大学医学部附属病院小児外科(病院医員)
昭和58年12月	国立小児病院外科(厚生技官)
昭和62年 4月	東京大学医学部附属病院小児外科(文部教官助手)
平成 5年 9月	米国カリフォルニア大学サンフランシスコ校胎児治療センター-短期留学
平成 6年10月	米国シンシナティ小児医療センター-留学
平成 9年 4月	埼玉県立小児医療センター-外科科長
平成18年 8月	東京大学小児外科教授

新任科長挨拶



リハビリテーション（部）科
 はが のぶ ひこ
 芳賀 信彦

このたび平成18年7月1日付けでリハビリテーション科（部）長を拝命いたしました。約12年振りに東大病院に戻り大きな不安がありました。かつて共に働いた多くの病院スタッフに声をかけて頂き、安心して仕事をスタートすることができています。私が6月まで勤務していた静岡県立こども病院は独立行政法人化を視野に入れた動きが始まったばかりで、全職員が期待と不安の入り混じった状態にありました。すでに法人化を果たし軌道に乗ってきている東大病院がどのようになっているのか興味を持って赴任してまいりましたが、病院組織、運営システムの違いにはまだ戸惑っているところです。

リハビリテーション部の役割は、中央診療部門の1つとして、各診療科の患者さんに対するリハビリテーション医療を提供することが主体です。医師はリハビリテーション治療の適応判断・処方他、リスク管理や装具の処方にも関わります。また治療中や、必要に応じて治療終了後も経過観察を行います。その他理学療法部門、作業療法部門、精神科作業療法部門、物理療法部門、精神科デイケア部門がそれぞれの役割を發揮しています。いずれも院内の需要は近年大きく伸びており、例えば理学療法・作業療法部門の最近の実績は、年間約4万単位（1単位は20分以上40分未満の療法を示す）に達しています。これはリハビリテーション医療が、治療の結果として残存した障害へのみ対応していた時代から、急性期からの障害予防への介入を含めるように大きく変化して来たこと、またリハビリテーションの対象が、運動器の障害中心であったものから、内部障害や精神疾患などを含めるように大きく広がってきたことと関係します。この変化は今後ますます加速することが予想されます。また、大学病院という特殊性のためもありますが、対象患者さんの病態が複雑で、かつ重症であるという傾向も以前に比べ強くなっています。

こういった流れの中で、リハビリテーション部（療法部門としては理学療法部門、作業療法部門、物理療法部門）は10月に中央診療棟2に移転しました。老朽化し、また需要の増加に対して手狭になっていた旧中央診療棟か

ら、リハビリテーション部創設43年を経て脱皮したことになります。私自身は実際の移転計画に参加しておりませんでした。より広いスペース、患者さんのアクセス改善が得られ、新たな評価・診療機器も導入されました。明るく広い環境は、入院生活から退院へ向かう患者さんが前向きな心を開いてくれるのに必ず役立つと思います。また中央診療棟2のオープンは、救急医療の拡大、手術件数の増加とも強く関連しています。これにより急性期リハビリテーションの需要はますます大きくなるものと考えられ、われわれとしては、より効率的なシステム作りをして、需要に応える努力をしなければなりません。

皆様もご存知の通り、リハビリテーションに関わる診療報酬は、今春大きな改訂を受けました。1つめは、従来の療法別（理学療法、作業療法、言語聴覚療法）の体系から、疾患別体系（脳血管障害等、運動器、呼吸器、心大血管疾患）に変わったことです。2つめは、発症（手術や急性増悪を含む）から一定の日数を超えた患者さんから点数を算定できなくなったことです。この変化は、より早期からの効率的なリハビリテーションを推し進めるという意味では正しい方向性なのですが、一方で従来のリハビリテーション医療が持っていた最終的な社会復帰を目指した機能回復の時間の流れとは相容れない部分があります。急性期病院のリハビリテーション部として、最終的な患者さんの社会復帰までを念頭に入れてどのように関わるのか、われわれが試されていると考えています。これに対する正しい結果を出して行くためには、今まで以上に各診療科とコミュニケーションを取り合うことが重要だと考えています。今後も皆様のご協力とご理解を宜しくお願い申し上げます。

芳賀 信彦 教授の略歴

昭和62年 3月	東京大学医学部医学科卒業
昭和62年 6月	東京大学整形外科研修医
昭和63年 7月	国保旭中央病院
平成 1年 7月	心身障害児総合医療療育センター
平成 2年 7月	榛原総合病院
平成 4年 1月	静岡県立こども病院
平成 5年 7月	東京大学整形外科助手
平成 6年 6月	静岡県立こども病院整形外科長 リハビリテーション部門担当兼任
平成11年 4月	浜松医科大学非常勤講師（兼任）
平成13年 4月	東京大学非常勤講師（兼任）
平成18年 7月	東京大学リハビリテーション科教授

東大病院創立150周年に向けて

シリーズ第13回 内科物理療法学講座の誕生

—真鍋嘉一郎初代教授の生涯と夏目漱石—

1. 四国松山中学から一高へ



真鍋嘉一郎教授

小学生の頃より医師になりたいと考えていた。松山中学の英語の先生は夏目漱石であった。真鍋は漱石先生の訳が違うと言ったところ「辞書が間違っているのだ」という返事であった。松山中学を卒業する頃、上京して一高の3部に入り、東京帝大医学部に入学したいと考えるようになった。

しかし松山中学から入ったものは少なく競争も激しいので熊本の五高を勧められた。英語の夏目漱石先生も五高に異動したので再び先生について勉強できるのではないかと言われたが、一高を受ける決意をした。合格は成績順に発表され1番であった。3部だけは1年のドイツ語を学んでから再試験があり入学を許可された。向寮（一高）生活で初めて同級生の長与又郎（後の病理学教授）を知った。寮では猫背から“按摩さん”と名付けられた。お国靴りが強く分かりにくい話し方なので「君、分からないからドイツ語で言ってくれ」とからかわれた。しかし入学直後から首席であった。父親不在で家が貧乏で仕送りが期待できないために軍部の翻訳などして苦勞して明治31年に卒業した。「諸君は国家の否、東洋文明の第一選手なり」が沢柳校長の告別の辞であった。

2. 東京帝大医学部に入学から青山内科入局

明治32年1月医学科に入学した。すぐに鉄門旅行で日光に遠足に行った。その時に後に眼科を選んだ井上達二（世界で初めて視皮質の局在部位を報告）と出会った。大学時代に高木兼寛（慈恵医大創始者）よりスカラシップの援助を受けた。ベルツ宅の住み込みもした。

明治37年卒業して2年後に、見合いを勧められたがお金がないので一度断ったが、小児科の弘田長教授の娘と結婚した。

卒後は青山内科に入局した。副手、助手の後、その数年前発見されたばかりのレントゲンを研究した。



真鍋嘉一郎教授の授業風景

長岡半太郎（物理学者）の後援のもとに温泉のラジウムの含有量の調査もした。

3. ドイツ留学

青山教授の命で明治44年、理学的療法研究のために3年間ドイツ留学をした。理学的療法は19世紀末ドイツのチームスエン教授が内科の一領域として導入した。東大病院では明治半ば内科の三浦謹之助教授が電気療法と水療法を始めたが報われなかった。しかしレントゲン線とラジウムの発見により発展が見込まれた。ミュンヘン大学でこの2つを勉強した。留学中の学会で野口英世と偶然に会い、親しくなった。真鍋は野口英世の細菌学の成功に感銘を受けた。留学の最後はベルリンで勉強した。大正3年帰国の途中、第一次大戦勃発する直前の米国へ行き、ロックフェラー研究所の野口英世を訪ねた。その年に帰国した。

4. 物理的療法研究所の設立

青山教授が伝染病研究所長を兼ねていた関係で技師となった。大正4年野口英世が16年ぶりに帰国することになり、横浜まで迎えに行った。青山教授にお願いして東京帝大での講演会を開催した。野口英世はその講演を振り返り、「東京帝大の講演は身に余る光栄」と述べたという。

大正5年、青山内科の支援で物理的療法研究所が設立され、職員は真鍋が講師、副手1、看齋師1、小使い3であった。主として水療法を行い、簡易的な電気マッサージも行った。この年の12月9日、夏目漱石の主治医として付き切りの看病をしてきたが、身が細るほどの献身的な治療にもかかわらず亡くなった。「いつもは潮騒にまぎれて聴こえない海中の鐘の音である



真鍋嘉一郎像（小野田高節作 1933年）

が、漱石の死とともに波が静まり、思慕の鐘がなりやまない」と思いを述べた。

青山が亡くなった後、研究所は独立し、さらに現在の龍岡門近くに大正7年寄附で2階建ての病室が新たに完成した。この建物は昭和20年3月10日の東京大空襲で消失した。それ以後物療内科の教室は現在の東研究棟に引越し、現在に至る。

5. 天皇陛下への直訴

大正11年、大学の予算や研究費が少ないことを天皇陛下に伝えたいと考え、皇室関係者が入院していたのでその旨伝えた。それがきっかけでこの話が陛下の耳に届き、「世の中にはそうした裏面の事情もあるものとは聞いていたがそうであったか。」と仰せられたという。これがきっかけで陛下一行が龍車で大学正門より入り、古在総長以下職員最敬礼の間に御降車。法文理工科を御迎覧のあと、山上御殿で入られた。陛下に答するという場面が展開された。

法文理工の施設について御聴聞のあと、「医科には物理的療法研究所という新しい設備があるときくが、何というものか」と御質問があった。総長、医学部長、三浦院長も面食らい答えられないので、「それでは追って書面を送って答申するよう」と仰せられた。そのあと皇后陛下は再び医科の教室を内科、外科、皮膚科、耳鼻咽喉科、小児科と一通りご覧になり、最後に龍岡門近くの物理的療法研究所をお指差し、「あれは何か」とおたずねになり、「物理的療法研究所です」とお聞きになって「そうか」と注目あそばされた。真鍋は感激した。

6. 関東大震災

関東大震災と附属図書館

大正12年9月1日関東大震災が突発し、附属図書館は焼失した。米国ロックフェラー財団は新築費用を寄附したいと申し出た。古在総長は喜んで申し出に応じる意向を持った。真鍋はこれを聴いて直ちに総長に面会を求め、「いやしくも日本帝国の国立大学がいかに困窮している場合とはいえ外国の寄附金に頼って図書館を再建とあっては国家の体面に係ります」と申し入れた。しかし、附属図書館はロックフェラーの寄附金によって新築され現在に至る。

7. 内科物理療法学講座の成立（大正15年）

物理療法研究所の講座化は真鍋の悲願であった。し

かし医学部物理療法講座とすることにしたが、“内科”をつけることは認められなかったので真鍋の方から断った。それから4年後、政治家や文部省が応援して「内科物理療法講座」という名称にした法案が通った。真鍋にとって苦節10年、大正15年8月27日に正式に物療内科が成立して初代教授となった。礼儀正しく、ネクタイやカラーを外して診察したことはない。「医者が病人を治療する時には武士が戦場へ出て一騎打ちをする時の礼儀と真剣味がなくてはならぬ」、物療内科創立25周年の席上「僕の今日あるのは一に故・青山先生の庇護と前途に光明を認めなかった時代に教室で働いてくれた人々のお蔭である」「医学の最後の目的は治療である」が口癖であった。

8. 浜口首相の暗殺事件（昭和5年）

貴族院議員の浜口雄幸が大正8年頃から真鍋が主治医として健康の相談相手となっていた。昭和5年11月14日午前10時、東京駅で狙撃された。すぐに自宅にいた真鍋に連絡が入った。直ちに物療内科へ電話し、助手の三沢敬義に輸血の準備をさせ東京駅へ向かうように指示し、外科の塩田教授に手術を依頼するとともに自分は東京駅へ直行した。首相は駅長室に運ばれていた。まず輸血をして大学病院に自動車で運び、塩田外科の手術室まで搬入した。腹部腸管に6箇所の貫通銃創があった。手術後幸い回復し真鍋に「いつかあなたは今後は公人として生きられたいと勧告したことがありましたね。それがために今日あなたによって助けられるとはこれは不思議な因縁ですよ」と言った。

9. 停年制反対と退官（昭和13年）

学内に60歳停年制が申し合わせができた時より、真鍋は反対してきた。満60歳になった時、自らトラブルを起こしたくないと考え3月を待つのではなく、昭和13年11月12日で退職した。その後三沢敬義が教授となった。現在は山本一彦教授が継承し、大学院重点化とともにアレルギー・リウマチ内科学講座と名称を変え、現在に至っている。

真鍋は昭和16年12月29日、東大病院にて直腸癌のために64歳で生涯を終えた。（加我）

引用文献

1. 真鍋先生伝記編纂会. 真鍋嘉一郎、南山堂、昭和25年
2. 東京大学医学部創立百年記念会. 東京大学出版会. 昭和42年
3. 松山百点. Vol.249 盛夏 2006

＜東大病院の“遺産” シリーズ9＞

1. 作曲家・山田耕筰より寄贈されたドイツ製“スタインベルク社製ピアノ” (看護師宿舎)



山田耕筰
(1956年文化勲章受章)

東大病院には2つのピアノがある。一つは外来ロビーのヤマハ製のグランドピアノである。カバーはオーストリアのベーゼンドルファーと書いてある。ベーゼンドルファー社は1828年の創立である。しばしば音楽に詳しい患者さんが東大病院にはベーゼンドルファーのピアノがあると感激したりするが中身とカバーは違う。このヤマハは東京芸大より寄贈されたものである。現在はコンサートのピアノは米国製のスタインウェーとヤマハが多い。

もう一つが芙蓉会（看護部の同窓会）のスタインベルク社製のアップライトピアノである。そのピアノの名は今では知る人がいなくなった。ドイツのベルリンに1908年～1940年にスタインベルク社があった。1911年にはピアノ製造業の中で評判を取り、1932年には大きなコンサート・グランドピアノを作るようになり、ベルリン・フィルハーモニーにも1台納められた。

第二次世界大戦の足音が近づくと1936年、創立者のユダヤ人のレヴィーとシュレンジンガーがナチスから逃れて英国に亡命した。1940年にはベルリンのスタインベルク社は新しい持ち主の物となり、その

名は消えることになった。スタインベルク社のピアノは世界中どの程度あるかわからない。わが国には文献によれば3台確認されている。岡山市政田小学校、京都府立綾部高等学校、長野県南佐久の八千穂村立八千穂中学校である。従って本院のピアノは4番目となる。

作曲家・山田耕筰よりスタインベルク社製ピアノが寄贈される

芙蓉会ではピアノの購入のために積み立てをしていたが、当時のピアノは高価で購入できないでいた。増田胤次先生（東大耳鼻科・2代目教授）の尽力で昭和13年（1938）山田耕筰愛用のスタインベルク社製のアップライトピアノが芙蓉会に寄贈された。このピアノは現在、看護師宿舎に保管されており、新品のピアノ購入よりも調律代がかさむため使用されていないが、いつの日か幻の音色を蘇らせたい。また、危うく廃棄されそうになったことがあった。

芙蓉会とは東大病院ナースの同窓会である。大正5年（1916）に創立されたので今年で90周年を迎えた。創立時に芙蓉会の「会歌」が作られた。作詞・木下柰太郎、作曲・山田耕筰の“富士の歌”である。作詞の木下柰太郎は東大皮膚科の大田正雄教授、教授任期（1937～1945）。山田耕筰（1886～1965）は本郷森川町9番地、現在の東大構内に生まれ、本年生誕120周年を迎え、日本のオーケストラ活動の基礎を固め、“からたちの花”“この道”“赤とんぼ”など皆どこか



山田耕筰生誕の地 現在の東大正門守衛所うしろ
本郷通り鉄柵に沿ったあたり



本郷森川町付近（明治28年東京府発行の地図）



山田耕筰寄贈のピアノ



昭和16年 音楽室でスタインベルクのピアノを弾くナース

で聴いたことのある多くの代表作を後世に残し、また「東京大学の歌」である「東京大学運動会歌（大空と）」を作曲した日本を代表する作曲家である。現在は“富士の歌”の次に、昭和30年（1955）に新たに“芙蓉会の歌”が作られた。作詞・中村孝也、作曲・下総浣一で、現在はこちらが歌われている。なおこの“富士の歌”は山田耕筰の全作品を集めている日本近代音楽館もこれまで知らなかったという。逆に楽譜があれば連絡して欲しいと言われた。

芙蓉 一万 二千 尺	富士 開 一 万 二 千 尺	四 の 神 山 神 な が ら 歌	希望 に 燃 ゆる 雲 の ほ ろ	月 貞 潔 の 嶺 に 澄 み く	雲 博 愛 の 谷 に 湧 く	三 の あ け ほ の い ろ	句 心 霞 一 万 二 千 尺	大 和 乙 女 の 姿 か な	桜 花 さ く 二 の 日 の 本 の	け が れ ぬ 雪 の 冠 き て、 姿 か 奈	一 万 二 千 尺	ふ り さ け 見 れ ば そ り 立 つ	清 き た ふ と き そ り 立 つ	富士 の 歌	作 曲 詞	山 木 下 太 郎
---------------------	----------------------------------	---	--	---	--------------------------------------	--------------------------------------	--------------------------------------	--------------------------------------	--	---	-----------------------	---	--	--------------	-------------	-----------------------

木下空太郎詩、山田耕筰作曲 楽劇“南蛮寺門前”

山田耕筰と本院の関わりは、同氏がドイツ留学中、楽曲を研究し、帰ってから日本楽劇協会を設立し、間もなく、木下空太郎の詩「南蛮寺門前」を読み、感激し、楽劇として筆を加えてもらい大正3年（1914）に作曲したことから始まる。その初演は当時本郷にあった市村座で行われた。

木下空太郎は子供の声を巧みに利用し“夕やけの歌”

「夕やけこやけ
摩訶陀の池の
さんしょの魚は
きらきら光る」

という、夢幻的な情緒を描き出すのに成功し、これが新しい童謡のさきがけとなったという。この楽劇は50名のオーケストラで演奏された（注：楽劇、オペラ様式の一つでワーグナーによって創始されたものでオペラを構成する諸要素を一つの融合体と考え無限旋律を用いた）

参考。Steinberg社のピアノ。有名なスタインウェイ社の演奏会用グランドピアノは世界中のコンサートホールで使用されている。それはSteinberg（1797～1871）がドイツのハンブルグでピアノ製造会社を創立し、1839年、州の博覧会で金賞を受賞したことに始まる。1853年米国に移住し、英語風にSteinwayと名称を変更し、1910年以降ニューヨークのロングアイランド市のスタインウェー村でピアノを製造している。

（加我、三浦）

参 考

- ・17回忌記念出版「この道—山田耕筰伝記—」社団法人日本楽劇協会編 昭和57年
- ・「山田耕筰全集2」岩波書店 昭和13年
- ・スタインベルクピアノ修復活用委員会編：「スタインベルクピアノ修復の記録、岡山県政田小学校のピアノ修復の成果と課題」吉備人出版 平成17年
- ・山田耕筰著「自伝はるかなり青春のしらべ」長嶋書房、昭和32年
- ・標準音楽辞典 音楽文友社 昭和41年
- ・「看護のあゆみ—明治・大正・昭和を通して—」東京大学医学部附属病院看護部看護士委員会編 平成3年

資料提供

- ・日本近代音楽館
- ・東京芸術大学附属図書館

医学歴史ミュージアムの紹介(4)

パリ大学医学部（デカルト大学）の医学歴史博物館（1954年創立）



1. パリ大正門のレリーフ

パリ大学は12世紀の創立で、ヨーロッパでもイタリアのボローニャ大学、スウェーデンのウプサラ大学と並ぶ古い大学である。医学部は1795年に設立され、現在はデカルト大学と呼ばれる。フランスの医学は偉大な臨床医と基礎医学者を生んだ。16世紀のパレ（1510-1590）は近代外科のパイオニアで創傷治療過程に神の手が積極的に関与していることを認識し、「神が治し、医師が助ける」「外科医は偉人に愛を抱き、その延命を願い、好悪に左右されることなく、金銭や報償で墮落することなかれ」という言葉を残した。

組織病理学者ピシャ（1771-1802）、精神科医ピネル（1745-1826）、聴診器を発明したラエネック（1781-1826）、低温殺菌法の発見者パスツール（1822-1895）、実験医学序説のベルナル（1813-1878）、神経学のシャルコー（1825-1893）、運動失語を発見したプローカ（1824-1880）、フォアー四徴症のファロー（1850-1911）などを生んだ。

地下鉄オデオン駅で降りるこの一帯はカルチェラタンと呼ばれ、ソルボンヌ大学、パリ大学医学部などの大学の街で、少し足をのばすとエコール・ノルマル、キュリー研究所がある。歩いて約10分でパリ大学医学部正門に至る。第一次大戦で戦死した卒業生のレリーフが校舎の壁が眼に入る。通りの反対側に古い校舎がある。フランスの医学史を飾る人々の大理石の像がたくさん並んでいる。さらに歩くと第一次大戦から第二次大戦、アルジェリア、インドシナで亡くなった同窓生の名が刻まれたレリーフが並んでいる。3階に上がると医学歴史博物館がある。入口に有名なシャルコーのヒステリーの患者を診療している臨床

講義のような大きな絵がある。内部に入ると体育館のような大きな空間があり、2階建てになっており、左右の壁面と真ん中のフロアに陳列ケースが並んでいる。エジプト時代より近代に至る医学の発展を時代別に解説があり、各時代の歴史的な医学関係の器具がショーケースに入って陳列されている。“アペロンの野生児”を書いたイタールの作成した貝殻状の補聴器、トルソーの作った気管カニューレ、眼球の模型、初期の顕微鏡、各種手術器具、キモグラフ、化学実験



2. パリ大医学部校舎入口



3. 神経学のシャルコー教授

講義のような大きな絵がある。内部に入ると体育館のような大きな空間があり、2階建てになっており、左右の壁面と真ん中のフロアに陳列ケースが並んでいる。エジプト時代より近代に至る医学の発展を時代別に解説があり、各時代の歴史的な医学関係の器具がショーケースに入って陳列されている。“アペロンの野生児”を書いたイタールの作成した貝殻状の補聴器、トルソーの作った気管カニューレ、眼球の模型、初期の顕微鏡、各種手術器具、キモグラフ、化学実験



4. 精神科ピネルの胸像

講義のような大きな絵がある。内部に入ると体育館のような大きな空間があり、2階建てになっており、左右の壁面と真ん中のフロアに陳列ケースが並んでいる。エジプト時代より近代に至る医学の発展を時代別に解説があり、各時代の歴史的な医学関係の器具がショーケースに入って陳列されている。“アペロンの野生児”を書いたイタールの作成した貝殻状の補聴器、トルソーの作った気管カニューレ、眼球の模型、初期の顕微鏡、各種手術器具、キモグラフ、化学実験



5. 医学歴史ミュージアムの内部



6. イタルの作成した補聴器



7. 義眼コレクション



8. ラエネックの聴診器



9. 木製の手術台



10. ナポレオンを剖検した手術器具

道具などがある。真ん中の広いスペースにはナポレオンを解剖した解剖セットや板で出来た手術台や中国の針の経穴の解剖像などが保存されている。

運動失語をブローカ失語というが、そのブローカが診療しブローカ失語を呈したタンという患者の脳はパリ大学医学部内のデジュリンが創ったデュピイトレン博物館

にある。

このミュージアムは世界の代表的なものの一つであるが、フランスの行事や祝日のための休館が多く、開館日と時刻をチェックすることをすすめる。

(加我)

クリスマスのイルミネーション点灯について

11月6日（月）～12月25日（月）の間、入院棟A1階中庭に、財団法人好仁会、カワナ食堂、食堂三四郎、理髪リ・リーフ、ツーリストサービスの協賛によりクリスマスのイルミネーションが点灯された。

点灯に先立ち11月6日（月）18：00に点灯式が行われ、服部雄幸総務課長のカウントダウンの合図と共に、入院患者様も参加されイルミネーションが点灯された。

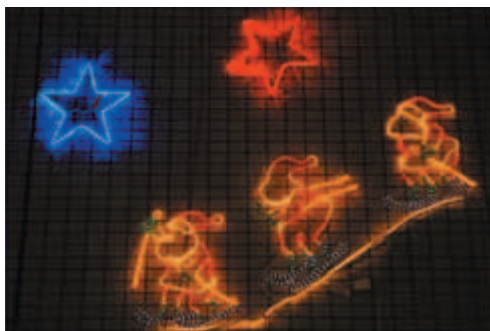
イルミネーションは、期間中は16：00～21：00まで点灯され、院内にクリスマスの色鮮やかな彩りを添えている。



カウントダウンの合図によりイルミネーション点灯



イルミネーション



イルミネーション



イルミネーション

出来事

平成18年8月～10月

8月1日(火) 東京大学オープンキャンパス

東京大学オープンキャンパスが実施され、医学部コースには、午前・午後併せて4組(各組25名)の高校生が院内を見学した。



8月1日(火) ミニコンサート

時間: 16:45～18:00

場所: 外来診療棟1階エントランスホール

演奏者: 北野里沙、里奈、中山博之各氏による声楽、チェロ、ピアノによる演奏が行われた。

(医療サービス推進委員会)



8月1日(火)

第4回接遇向上センター新設のご挨拶と今後の取り組みについて

時間: 18:00～20:00

場所: 研修講堂

演奏者: 竹永和子氏

東京大学医学部附属病院 接遇向上センター顧問
(マザーリング&ファミリーナーシング研究所代表)

内容: 接遇向上センター新設のご挨拶と今後の取り組みについて及び態度のカーマナダしからハグまで

(後援: 総合研修センター)

8月7日(月)

中国青島大学医学院附属病院関係者、東大病院見学

中国青島大学医学院附属病院董菡副院長ほか3名が院内の見学をした。



8月8日(火)

サウジアラビア厚生省関係者、東大病院見学
サウジアラビア厚生省関係者9名が院内の見学をした。



8月10日(木)

第5回接遇向上センター新設のご挨拶と今後の取り組みについて

時間: 18:00～20:00

場所: 入院棟A 15階大会議室

演奏者: 竹永和子氏

東京大学医学部附属病院 接遇向上センター顧問
(マザーリング&ファミリーナーシング研究所代表)

内容: 接遇向上センター新設のご挨拶と今後の取り組みについて及び五感を磨く接遇と今後の展開

(後援: 総合研修センター)

8月18日(金)

リスクマネジメント研修(講演会)

時間: 18:00～19:30

場所: 臨床講堂

講師: 京都大学医学部附属病院医療安全管理室長 長尾能雅氏

演題: 『医師の参加なくして患者安全なし: 京大病院の取り組み』

(医療安全対策センター)

8月23日(水)

アジア地域の若手研究者、東大病院見学

国際生体医工学会、アジア地域の若手研究者交流行事により日本、韓国、台湾、香港及びシンガポールの5カ国から選ばれた若手研究者5名が、院内の医用生体工学関連研究施設(医工連携部、ティッシュエンジニアリング部)の見学をした。



8月23日(水)

22世紀医療センター公開セミナー

時間: 17:00～19:00

場所: 医学部鉄門記念講堂(教育研究棟14階)

内容: 「放射線治療と免疫細胞療法の併用による新たな集学的治療の可能性」

・「進行癌に対する新しい免疫放射線療法の可能性」

東京大学医学部附属病院 放射線科助手 白石 憲史郎

・「日本の癌治療のウィークポイント: 放射線治療と緩和ケア」

東京大学医学部附属病院 放射線科助教授/緩和ケア診療部部長 中川 恵一

・「がんに対する免疫細胞治療 -22世紀医療センターにおける新たな取り組み」

東京大学大学院医学系研究科 免疫細胞治療学(メディネット) 講座助教授 垣見 和宏

(主催: 医学部附属病院放射線科、医学系研究科免疫細胞治療学講座)

8月29日(火)

リスクマネジメント研修(講演会)

時間: 18:00～19:30

場所: 臨床講堂

講師: 立教大学現代心理学部心理学教授 芳賀 繁氏

演題: ヒューマンファクターから見た医療事故防止

(医療安全対策センター)

9月1日(金) サンクンガーデンオープン

外来診療棟と中央診療棟2との間に患者様の潤いの場として通路部分にウッドデッキを施し、通路周りにさまざまな日本の色彩のタイルを用いたサンクンガーデン(庭空間)がオープンした。

また、ガーデン奥には、「ローション好仁会東大病院店」、「ドール好仁会東大病院店」が同日開店した。



9月5日(火) ミニコンサート

時間: 16:45～18:00

場所: 外来診療棟1階エントランスホール

演奏: 鉄門室内楽の会によりピアノ、ヴァイオリン等による演奏が行われた。

(医療サービス推進委員会)



9月5日(火) 第1回接遇マインド講座

時間: 17:30～19:00

場所: 研修講堂

演奏者: 竹永和子氏

東京大学医学部附属病院 接遇向上センター顧問

(マザーリング&ファミリーナーシング研究所代表)

内容: 五感を磨く接遇

(後援: 総合研修センター)



9月8日(金) 防災訓練の実施

時 間：14：00～16：30
場 所：入院棟A、外来診療棟1階玄関、中央診療棟2、他
訓練内容：大震災対応への一斉防災訓練
病棟全フロア状況チェック&報告・避難訓練（一部病棟）、被災患者受入（トリアージ）訓練他
（労働安全衛生管理室）

9月12日(火) リスクマネジメント研修（講演会）

時 間：18：00～19：30
場 所：臨床講堂
講 師：樋口晴彦 氏
警察大学校警察政策研究センター教授（危機管理担当）
演 題：アウトソーシングのリスクについて（医療安全対策センター）

9月15日(金)

Ⅱ期中央診療棟竣工記念式典及び祝賀会挙行
（詳細は、掲載ページを参照）

9月22日(金)

平成18年度自衛消防隊操法大会
時 間：12：30～16：00
場 所：本郷消防署裏、旧小学校跡地
出場隊：本院からは、3人操法（男子）、同（女子）の2隊が出場して自衛消防活動技術の確認と日常の成果を披露した。

**9月26日(火)**

接遇研修「第1回コミュニケーションスキル講座」
時 間：17：30～19：00
場 所：研修講堂
講 師：浅井久栄（心の相談センター副看護師長）
竹永和子（接遇向上センター）
内 容：「聞き上手・ほめ上手・伝え上手」（講義編）
（後援：総合研修センター）

9月29日(金)

第12回東大研究倫理セミナー
時 間：第Ⅰ部（更新受講者対象）：17：00-17：30
第Ⅱ部（新規受講者必修；更新受講者任意）：17：40-18：10
第Ⅲ部（新規受講者対象）：18：15-19：30
場 所：医学部鉄門記念講堂（教育研究棟14階）
司 会：赤林 朗（医学系研究科・医学部倫理委員会委員長）
荒川義弘（病院臨床試験部副部長）
第Ⅰ部 更新受講者講習会
荒川義弘（病院臨床試験部副部長）
（休憩）

第Ⅱ部 基調講演（新規受講者は必修、更新受講者は任意）
「診療情報の個人情報保護と研究への利用」
樋口範雄（東京大学大学院法学系研究科教授）

第Ⅲ部 新規受講者講習会

- 1 各種指針と医学系研究科・医学部における研究倫理審査体制
赤林 朗（医学系研究科・医学部倫理委員会委員長）
- 2 研究倫理審査を受けるための手続き
徳永勝士（ヒトゲノム・遺伝子解析研究倫理審査委員会委員長）
- 3 臨床研究における個人情報管理
大江和彦（ヒトゲノム・遺伝子解析研究個人情報管理者、病院医療情報管理委員会委員長）
- 4 病院治験審査委員会への申請と臨床試験部の支援
長瀬隆英（病院治験審査委員会委員長）

まとめ 長瀬隆英

主 催：医学系研究科・医学部倫理委員会、ヒトゲノム・遺伝子解析研究倫理審査委員会、病院治験審査委員会、病院臨床試験部、病院企画情報運営部、病院総合研修センター

10月4日(水) 夜間救急入口が変更される

救急部・時間外受付が中央診療棟2、1階へ移転したことにより、旧夜間救急入口（管理・研究棟）は、10月3日（火）に役目を終えた。

**10月16日(月)**

接遇研修「第2回コミュニケーションスキル講座」
時 間：17：30～19：00
場 所：研修講堂
講 師：浅井久栄（心の相談センター副看護師長）
竹永和子（接遇向上センター）
内 容：トーク&セッション
「聞き上手・ほめ上手・伝え上手」（演習編）
（後援：総合研修センター）

10月18日(水) 第2回感染制御セミナー

時 間：17：30～19：00
場 所：入院棟A 15階大会議室
講 師：感染制御部医師
演 題：「いまさら聞けないMRSA」「バンコマイシンはどんな菌に有効？」「みんな知らないVRE」「本当に怖い多剤耐性緑膿菌（MDRP）」「カルバペネム系抗菌薬は万能薬？」
（感染対策センター）

10月19日(木) 特別講義接遇マインド講演会

時 間：18：00～20：00
場 所：入院棟A 15階大会議室
講 師：帯津三敬病院長 帯津良一 氏
内 容：治療現場の「場」に活かす接遇マインド
（後援：総合研修センター）

10月23日(月)

リスクマネジメント研修（講演会）
時 間：17：10～18：30
場 所：臨床講堂
講 師：科学技術文明研究所特別研究員 稲葉一人 氏

演 題：リスクマネジメントで達成できないことと、その対策—セルフリスクマネジメントとコンフリクトマネジメント（医療安全対策センター）

10月23日(月)～27日(金)

第9回食事療法展
時 間：9：00～17：00
場 所：入院棟A 1階レセプションルーム
内 容：外食・菓子・塩分などの展示及び体験コーナー（血圧・血糖値・体脂肪測定）を設置し、ミニ講習会を毎日開催した。来場者は、延べ2259名であった。
主 催：栄養管理室
共 催：東京大学医師会

**10月24日(火)**

東京大学稷門(しよくもん)賞授与式
時 間：17：00
場 所：山上会館
内 容：本院においては、22世紀医療センター寄附講座、下記の23社へ東京大学稷門(しよくもん)賞が授与された。
佐川急便株式会社・田辺製薬株式会社・株式会社メディネット・株式会社NTTデータ・テルモ株式会社・武田薬品工業株式会社・アンジェスMG株式会社・株式会社サトウスポーツラザ・株式会社日立製作所・株式会社日立メディコ・中外製薬株式会社・ニッセイ情報テクノロジー株式会社・株式会社ハイメディック・GE横河メディカルシステム株式会社・エア・ウォーター株式会社・エーザイ株式会社・クインタイルズ・トランスナショナル・ジャパン株式会社・三井物産株式会社・東京海上日動火災保険株式会社・三共株式会社・ジョンソン・エンド・ジョンソン株式会社・株式会社コカ・コーラ東京研究開発センター・富士フィルム株式会社

**(東京大学稷門賞)**

本学は、平成14年度から本学に私財の寄付、ボランティア活動及び援助、寄附講座、寄附研究部門等により、本学の活動の発展に大きく貢献した個人、法人又は団体に対し、感謝の意を表すため「東京大学功績者顕彰制度」を設け、その功績に対し「東京大学稷門賞」を贈呈することといたしました。（現に在籍する本学の教職員及び学生を除きます。）

なお「稷門」とは、中国の戦国時代の齊（現在の山東省）の首都の城門の名前です。齊の威王、宣王が学者を厚遇したため、齊の都に天下の賢者が集まり、学問が栄えたという故事をこの賞の名称は踏まえています。稷門付近は「稷下」と呼ばれ、多くの学者が集まったことから、「稷下の土」という言葉も生まれました。（出典「史記」）

これまでに東大病院ではここにボランティアが受賞している。

東大病院の四季

秋の彩り

夏の残照が残る9月中頃から冬を迎える前の秋のプロローグとして、草木達の秋の彩りが華やかに始まる。

始めに神秘的な彼岸花（別名「曼珠沙華」）の色鮮やかな真っ赤な花を医学図書館裏の歩道に見ることが出来る彼岸花は毎年お彼岸の頃に茎の状態の花を咲かせ秋の始まりを告げる花として欠かすことの出来ないものとなっている。また彼岸花は、花が終わってから葉が出ることから「葉は花を思い、花は葉を思う」ということで、『相思華』とも呼ばれている。



彼岸花（曼珠沙華）



コムラサキ（小紫式部）



初秋の夕日



ハナミズキ（花水木）

次に小紫（別名「小紫式部」）の紫の小粒の実が、しなだれる葉の脇に集まって付く姿が管理・研究棟玄関脇に見られ、花言葉は「聡明」で紫の実が清しさを感ぜさせる。

また、病院の窓から夕日に目を向けると、色鮮やかな秋の夕景を見ることが出来る。「秋の夕日はつるべ落とし」と言われるように僅か2分半で終わってしまう一瞬の輝きの瞬間である。

最後に春にピンクと白の花をつけ外来棟のバス通りを美しく飾ったハナミズキ（花水木）も秋の深まりと共に葉が赤く紅葉し、赤い実を付け赤く色づいた葉と実が管理・研究棟のレリーフと重なり秋の陽に色鮮やかに輝いている。

10月31日(火) ミニコンサート

時 間：16：45～18：00

場 所：外来診療棟1階エントランスホール

演 奏：LIVING BEHAVIOR、歌を中心としたライトミュージックが演奏された。

（医療サービス推進委員会）



10月31日(火)

接遇研修「第3回コミュニケーションスキル講座」

時 間：17：30～19：00

場 所：中央診療棟2、7階大会議室

講 師：オフィス Serendipity 代表取締役 鱸 伸子氏

内 容：「メディカルコーチング」について
（後援：総合研修センター）

発 行 平成18年11月30日

発 行 人 永井良三

発 行 所 東京大学医学部附属病院

〒113-8655 東京都文京区本郷7-3-1

TEL 3815-5411

「東大病院だより」編集委員会

編集委員長 加我君孝

事務担当 総務課総務企画チーム庶務担当

東大病院広報企画部

連絡先 TEL 5800-9769

E-mail: SyomuAll@adm.h.u-tokyo.ac.jp

印刷所 株式会社学術社